

『主の来臨の希望』(イザ 2:1~5)

預言者イザヤが活躍した紀元前8世紀、イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ、ユダ王国もアッシリアの実質的な属国となってしまいました。この時、イザヤは終わりの日に、エルサレムを多くの国々が振り仰ぐことになると語りました。「終りの日に」は直訳すると「日々の終わりにおいて」となり、終末の日という最後の一日よりは、そこから始まる諸々の新しい時、新しい時代への転換点となるという意味です。

しかもそれは「いつか力を回復し、強くなって他の国々に治めるようになる」ということではなく、「剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」というのでした。この言葉は宗教や文化を超えて世界平和の理想を表す言葉としてよく知られ、国連本部にこの句に基づいた碑が置かれています。ところで、ヨエル書4章10節には「お前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ。」という言葉が記されています。これが元来の言葉であったと考えられています。まだ軍隊が組織化されていなかった時代、敵が攻めてくると、人々は農具を武器に作り変えて戦いに臨んだのでした。イザヤはこの言葉をひっくり返して用い、武器を捨てて平和を選び取る意志、戦わない意志を明確に示したのです。イザヤは「今は国々の争いが剣によって解決されているが、いつの日か、平和的に解決される時が来るであろう。そのように神さまの教えに生きる者となった時、この国が多くの国々に敬われ尊重されるものとなる」と語ったのです。

日本国憲法の第九条一項の戦争放棄は諸外国の憲法にもみられますが、二項の戦力を保持しないことと交戦権の否認は世界に類を見ない斬新な規定として評価されてきました。第九条は、日本国憲法の成立過程で、当時の幣原喜重郎首相が連合軍総司令部側に提案したと言われていました。

私たち、キリスト者は、今こそ、このイザヤ書の幻をどう受けとめるか、問われているのではないのでしょうか。私たちの希望とは、神さまによってもたらされる真の平和を實踐し、十字架の死に至るまで神さまと人とにすべてを献げて歩んだイエス・キリストによって与えられる希望であり、この方を信じることから生まれる希望にほかなりません。キリスト者が問うべきことは、「未来はいったいどうなっていくのだろうか」ということではなく、「今、この時代と社会の中で、私たちはどんな役割を果たすべきなのだろうか」、「神さまは私たちに何を期待しておられるのだろうか」を自らに問うことであると思われまます。